

# 成瀬仁蔵と「女子大学」設立—吉敷村出身者との関わりを中心に—

永山 由里絵

## はじめに

成瀬仁蔵（1858～1919）は、日本初の「女子大学」<sup>1</sup>設立に奔走し、1901（明治34）年に日本女子大学校（現 日本女子大学）を創立した人物である。成瀬は、1896（明治29）年に著書『女子教育』において、次のように「女子大学」設立の志を表明した。

余は修業年限三ヶ年位の一種の大学を起し、最高の教育を受く可き資格ある女子の爲めに、専門の業を得るの便を開くの必要あるを信ずる者也。已に数千人の高等女学校卒業生を出せる今日に於ては、少くとも日本全国に於て、此の如き種類の大学一校を要すべし。故に先ず一の女子大学を関東に興し、漸次、関西に一校、九州に一校、都合三校の女子大学を興し、之を日本帝国に於る、女子教育の大中心たらしむるの必要あるべし。<sup>2</sup>（下線筆者<sup>3</sup>）



日本女子大学成瀬記念館所蔵

そもそも成瀬が女子教育に携わる契機は、牧師・教育者である同郷の先輩澤山保羅がもたらした。吉敷村（現 山口市吉敷）の長州藩士族の家に生まれた成瀬は、郷校憲章館において学び、明治時代になると山口県教員養成所に通い、卒業後は県内の小学校教員をつとめた。1877（明治10）年、澤山の影響により郷里を離れて受洗し、さらに澤山が大阪に設立したキリスト教<sup>4</sup>主義の梅花女学校において主任教師となるのである。その後も教員、さらには牧師となって各地で活動し、1890（明治23）年には、女子教育研究視察と宗教研究を目的としてアメリカに留学する。帰国後は本格的に「女子大学」設立運動を始め、多くの財界・政界の有力者からの賛同と寄附金を得て、1901年に日本女子大学校（現 日本女子大学、以下女子大と略称）の開校を実現する。

さて、この女子大設立までの経過において、成瀬は大きく方針を変えている。それは、熱心なキリスト教徒であった成瀬が、女子大を特定の宗教に拠らない学校として設立するのである。いわば、キリスト教からの学校運営上の脱却である。

この理由について、新井明氏は「キリスト教を嫌い、女子の高等教育には無理解の土壌のなかで、経営的に困難であることを、ほかならぬ成瀬はよく承知していた」<sup>5</sup>と述べ、教員・牧師時代にキリスト教主義の女学校経営・伝道に苦心した経験が、女子大の経営に影響したと考察した。筆者も新井氏の論考を継承するが、成瀬一人の考え方如何で女子大開校が実現できるわけではなく、根拠として十分ではないように思われる。

本稿では、成瀬がなぜそのような方針を採り、女子大設立運動を行ったのか、周囲からの影響にも注目しながら改めて経過を整理する。そして、初等教育でも十分とされた明治時代の日本において、かつて無い「女子大学」設立<sup>6</sup>を可能にする条件とは何であったのか、その一端を考察したい。

## 1. 出郷

### (1) 青年期まで

成瀬が吉敷村で過ごした幼少から青年期については、成瀬の生前から編纂が始まった仁科節編『成瀬先生伝』<sup>7</sup>、中畠邦氏『成瀬仁蔵』<sup>8</sup>、片桐芳雄氏の論考<sup>9</sup>に詳しいが、ここでは比較的近年翻刻が進んだ成瀬の講話記録「実践倫理講話筆記」に、成瀬の青年期と出郷との関係をうかがわせる記述があるため、注目したい。

成瀬は、女子大開校後の講話の中で、自身の志がどのような土壌の上に成り立ったかについて生徒に説明する際に、少年期を語った。講話記録によると、

私の生れた処からは、奇兵隊と云ふものが沢山出ました。(中略)我が従兄も先生も、国のために命を捧げられたのである。故に、我々も国のために命を捨てると云ふ決心をしたのであります。(中略)之れが、我々子供の時に自分が軍人になろーと決心した訳である。<sup>10</sup>

とあり、奇兵隊等の影響から一度は軍人になろうと決心したという。周知のように、長州藩では対外的な危機意識から尊王攘夷運動が展開され、1864(元治元)年には四国艦隊下関砲撃事件が起こり、さらに同年には幕府側との対立から幕長戦争が起るなど、動乱は激しさを増し、長州藩各地の若者に影響を与えた。成瀬のより身近な範囲では、吉敷毛利家臣が1863(文久3)年に宣徳隊を結成し、1864(元治元)年には5人が奇兵隊に客員として入隊する。その5人が奇兵隊から解散した後も、宣徳隊と保守派の驍衛士のうち有志を連合して良城隊を結成し、1866(慶応2)年芸州口の戦い等に参戦した<sup>11</sup>。成瀬の講話中に現れる「従兄」は佐畑信之(1847~1893)であり、「先生」は憲章館の第5代学頭を務めた大田報助であろうか<sup>12</sup>。10歳に満たない頃の成瀬は、幕末の動乱を幼いながらに見聞きし、戦争への参加を希望したのである。この決心は父小右衛門の勧めによって教師の道へと転向されるのであるが、教師を務める中でも成瀬は別の決心を立てようとする。講話の続きに、赴任先が伊藤博文等のゆかりの地であったことを振り返りながら、次のように述べた。

十七の時には今の熊毛郡の小学校長となり、(中略)どー云ふ訳か其の山尾庸三君の建てられた二嶋の小学校に行き、其の後参りました湯田と云ふ処は、井上侯爵の別荘があった。そー云ふ処で、度々お話を聞いたことがある。即ち伊藤公爵とか山尾子爵とか井上侯爵と云ふよーな方、斯くの如き先輩の話を聞いて居った我々子供は、将来何か志を立てんければならぬ。何か国家の為に尽さねばならぬ。仮令低い士であるとも、貧しい家に生まれよーとも、そー云ふことは意に介するに足らぬ。何ぞ志があったならば、遂げられないと云ふことはない。出来ぬと云ふのは為さぬのであると云ふことを、悟らされた



日本女子大学成瀬記念館所蔵

のである。<sup>13</sup>

伊藤（1841～1909）、山尾庸三（1837～1917）、井上馨（1836～1915）それぞれの出身地である熊毛郡<sup>14</sup>、二島<sup>15</sup>、湯田<sup>16</sup>において小学校教師を務めたことにより、既に名を成していた「先輩」を意識し、自身も何か国家のために志を立てなければならないと考えたという。

この講話時は既に女子大が開校しており、やや結果論的な印象も受けるが、成瀬の活動の根本に、少年時代から育まれた山口県（長州藩）出身者としての自負があったことは確かであろう。県内で教員を務めながら、伊藤等の後に続いて何かを成したいと熱望する成瀬は、澤山保羅との再会によってキリスト教を知り、転機を見出して出郷するのである。

## （2）出郷を支えた2人

山口を出発したものの、未だ明確な指針の無い状況にあって、成瀬が最初に頼ったのは前記の講話にも登場した従兄の佐畑信之であった。佐畑も吉敷村の出身であり、1877（明治10）年時には兵庫県庁に勤め神戸に住んでいた。成瀬は佐畑家に下宿し手伝いをして暮らしたが、しばらくして佐畑から官吏の道を勧められ、議論の末にこれを拒否し、キリスト教信仰を第一として大阪の浪花公会（現浪花教会）に澤山保羅を訪ねた。そして同じく浪花公会の前神醇一の家を下宿することとなる<sup>17</sup>。成瀬は佐畑家における2、3か月<sup>18</sup>の生活の中で、キリスト者として活動することに出郷の目的を定めたのである。

澤山保羅（馬之進）は、吉敷村出身の牧師であり、成瀬が生涯最も尊敬したと伝わる人物である<sup>19</sup>。澤山は1869（明治3）年、神戸においてアメリカン・ボード（The American Board of Commissioners for Foreign Mission）から派遣された宣教師グリーン（D.C Green）に英語を学び、これを契機としてキリスト教にひかれ、1872（明治5）年にアメリカに渡り、帰国後はアメリカン・ボードの方針のもとで浪花公会の牧師となる。澤山によって洗礼を受けた成瀬も、この後アメリカン・ボードによる伝道の系譜に連なることとなる。

1878（明治11）年、澤山を創立者として大阪に梅花女学校が設立されると、20歳の成瀬は主任教師となり、設立の祝辞で次のように述べた。

天父我を愛すれば我人を愛し、人も亦我を愛す。是れ万物の霊と称する人たるものゝ本分なり。（中略）夫れ人たるものは婦人より生れ、其の教育を受け、其の性を習はざるものなし。故に愛に由り養育すれば愛となり、悪により養育すれば悪となる。之当然の理なり。然れば婦人は文明開化の基礎とも謂ふべけんか。<sup>20</sup>

成瀬は山口県での教員経験を活かしながら、キリスト教との出会いによって女子教育に携わった。そして「人」としての女性を尊重し、且つ教育の観点から国の文明開化の基礎は女性にあるという見解を持つようになるのである。

この段階では伝道を第一に女子教育に携わっており、信者のみによる自給論<sup>21</sup>を固持し、その方針に違う女学校理事たちとの対立に際して女学校を辞めるに至る<sup>22</sup>。その後は、奈良県の大和郡山に移り、宣教師や同志社の新島襄等の立ち合

いによって按手礼を受け、大和郡山教会の牧師となり、各地において伝道活動を行うのである。1886（明治19）年、アメリカン・ボードが伝道地とした新潟に第一基督教会が設立されると、澤山の後押しも受けて初代牧師に就任し、1887年3月に澤山が亡くなるも引き続き新潟に残り、1887年5月には新潟女学校を設立して校長を兼任した。

成瀬の校長就任を受けて、喜んだのは従兄の佐畑である。

貴地モ漸次神ノ愛ト御尽力之効果ニ寄り、伝道上御好都合之趣、殊ニ女学校御創立之由、彼是好聞ニ接シ、国家之為メ欣喜此事ニ候。<sup>23</sup>

佐畑は、この頃にはキリスト教に入信し、女学校創立を伝道の一環として捉え、成瀬の目的意識と同様に「国家之為メ」になると書簡で喜びを表した。成瀬にとっては、澤山が亡くなり大きな拠り所を無くした時期であったが、佐畑は引き続き成瀬が前進する際の理解者となったのである。

このように、成瀬は伊藤等「先輩」を仰ぎ見ながらも、特に佐畑と澤山との関わりをもとに自身の目的と向き合い、牧師・教育者として活動する道を選択したと捉えられるのである。

### （3）新潟時代

新潟女学校長となった成瀬は、多忙な生活によって1年ほどで新潟教会牧師を辞任し、女学校を中心に活動するようになる。1888年1月3日には、自身の按手礼に立ち合った同志社学院の新島襄に辞任を報告した。

小生、先年愛師ニ御咄申候通、勉学之志アリシニ、当地に参り実ニ繁忙思ノ如く勉学出来ず、（中略）到底小生ハかゝる難き教会創業之際ニ、女学校・地方伝道・己ノ勉学一時ニ難相成、是非一方ニ専任して勉学する積ニテ、女学校ハ手を引き、全く教会ノ為全身を入れんと考候へ共、到底之未信者之知事、裁判長、及び商議員ニて今手を引く能はざる事情有之。然らば教会ニも手を出し、両方兼務出来る乎と考れば、中々此教会之為ニ尽すニは全力を入れざる可らず。故ニ種々考之上、終ニ教会を辞じ全くの教会ト地方伝道（是ハ時々）ト自分之勉学ニ掛る事ニ決心仕候。然るに、小弟辞表を出せし後も益々教会六ヶ敷、教師らも大ニ心痛致候。<sup>24</sup>

この書簡において注目すべき事は、女学校長を続ける理由である。成瀬はキリスト教「未信者」の知事らとの関係から手を引けないためと述べる。新潟女学校の発起人は、8人中6人が非信徒とされ、その6人は篠崎五郎（知事）、富田禎二郎（始審裁判所長）、鈴木長蔵（実業家・政治家）、近藤幸止・永沢正常（県書記官）、佐藤精一（地方紙主筆）といった顔触れであり、半官半私 성격が強かった<sup>25</sup>。資金面においても寄附者はほとんどが非信徒であり<sup>26</sup>、彼等からの期待に応えるため、信者のみによる自給にこだわった梅花女学校時代とは異なり、「未信者」との関わりによる女子教育の継続を優先したわけである。

ただし、成瀬自身がここで強調したのは、「勉学之志」「己ノ勉学」であろう。この頃の成瀬は、教会や学校の運営に携わりながら、自身も学ぶ場や時間を求めていた。そして1890（明治23）年、成瀬は女学校校長をも辞任して「己ノ勉学」

を選択し、アメリカ留学を決めるのである。

留学の目的は「女子教育研究視察と宗教研究」<sup>27</sup>であったとされる。アメリカは新島や澤山の留学先である。また、大阪・新潟時代に知り合ったアメリカン・ボードの宣教師たちが現地での支援を請け負ったことが、アメリカ留学を後押しした<sup>28</sup>。旅費や日本に残す妻の生活費等は、教会関係者を含む国内の親しい人々を頼り<sup>29</sup>、留学直前に佐畑家にも訪れる。佐畑の書簡には、

此程ハ久し振御尋被下、何之御愛興も無之、失口（破損、以下同）之段、平ニ御容免可□□候。扱御相談之重件□条、折角之事ニ付此度ハ格別ニ繰合せ、幾分之御手伝仕度□之処、当時小生之□元何分ニも不任心慮廉も有之、遺憾無限存候。幸ヒニ田村氏ニ御□□状、相叶候由、小生ノ趣□も安心仕候。依而別紙証文ニ調印差出候間、御落手被下度候。<sup>30</sup>

とあり、成瀬は佐畑に金銭面の相談をした。それに対し佐畑は、自身では力にならないが、成瀬の梅花女学校時代の同僚であり、校主・校長を務めた田村初太郎<sup>31</sup>が支援を承諾したため、保証人としてであろうか、証文に調印し成瀬に送ったと記す。

このように、新潟での成瀬は「未信者」からの支援を受け、教育と信仰とを分け始める。しかし「未信者」という言葉自体、成瀬がキリスト者であることを表していると言えよう。成瀬は教育と信仰両方を並立した立場を保ち、教会関係者や周囲の支援を受け、アメリカにおける勉学に今後の指針を求めたのである。

## 2. 留学

### (1) 妻に伝えた「女大学校」設立の志

成瀬は1890（明治23）年12月末から1894（明治27）年1月の3年間、アメリカに留学する。1891年1月中旬には新島襄が卒業したアンドーヴァー神学校において、タッカー（W. J. Tucker）から社会学を学ぶことを決め<sup>32</sup>、通学開始後の10月にはタッカーの社会学と説教、その他に教会史や宗教哲学等を選択したことを北越学館の知人に報告した<sup>33</sup>。一方で、同年2月14日、成瀬は妻<sup>34</sup>万寿枝に次のような書簡を送る。

扱て、過日来余の life work ニ付き種々思考し、一時ハ大ニ脳をなやます程熟考致候。素より、未だ視察も研究も足らざる故、女子教育之方針をも確定甚た六ヶ敷候へ共、とも角余が帰朝後は、一の女大学校を興し、之を中心トシ本体として、日本全体ニ感化を及ボす事ニ致度候（凡テコレラの事は秘密ニして、誰ニも御咄無之、極内密ニ被成下度候）。<sup>35</sup>

成瀬は留学してひと月半の時期に、「女大学校」設立の計画を万寿枝に述べたのである。さらに3月4日にも、

〈素より社会学ハ今迄通ヤルツモリナリ〉而して其業ヲ全く卒りし上帰朝、日本ニて一年間ハ其財料ヲもて書を著し、余之主義を主張し、かつ女大学校之為ニ準備を整候。其後先日通知致候通、大学を興す事ニ骨折る積ニ御座候。

(コノ大学ノ企ト書を著ス云々之事ハ決して他ニ洩サヌ様ニ被成度候)。  
と万寿枝に送り、帰国後に「書」を著し、女子大設立の準備を行う予定であると伝えた。つまり帰国後に『女子教育』として出版される「書」も、この時期から成瀬の念頭にあったのである。両方の書簡に共通して「極内密ニ」「他ニ洩サヌ様ニ」と記すことから、自身の功績として成し遂げようとの熱意がうかがわれる。また、前記のようにこの留学は日本の教会関係者や知人の支援を受けており、留学先で修める学問以上に、当時の日本においては常識から外れた女子大設立という目的が目立っては問題になると考えたのであろうか。妻にのみ志を伝え<sup>36</sup>、自身は社会学の研究を続けてアメリカの大学<sup>37</sup>等を視察し、現地での研究および帰国後の女子大設立のため、「女子教育之方針」の確定に努め始める。この頃成瀬が考察した「女子教育之方針」については、同じ題名で作成されたノートが残っており、次節において内容を確認したい。

また、成瀬は2月20日、自身の「天職」について、

吾天職、教員にあらず。牧師にあらず。社会改良者なり。女子教導者なり。

父母の相談相手也。創業者なり。人身興憤者也。<sup>38</sup>

と日記に記したと伝わっており、万寿枝に書簡を送ったのと同時期に、「社会改良者」「女子教導者」になることを生涯の目的と定めた。

万寿枝宛の書簡や日記によって明らかなように、成瀬の具体的な目標は留学初期の段階で女子大設立と定まり、アメリカでの「己ノ勉学」は、キリスト者としてではなく「社会改良者」の立場から女子教育の研究を行うことになったのである。

## (2) 「女子教育之方針」

成瀬が1891年<sup>39</sup>3月10日付で書き始め、約1年間にわたり使用したノートがある。表紙・裏表紙を除いて本文は192頁に及び、表紙から始まる146頁の「女子教育之方針」と、裏表紙から始まる46頁ほどの「種子」が記されるノートである。「女子教育之方針」には154項目の所感が記され、多くは女子教育に関してであるが、一般的な人間観・教育観・社会観も取り上げられる。「種子」とは「女子教育之方針」を構想するにあたっての種すなわち取材メモと位置づけられる<sup>40</sup>。成瀬はタッカーからの教示や視察を通して女子教育に関する知見を深め、時にこのノートを携帯して記していったと考えられる<sup>41</sup>。ここでは、特に成瀬が宗教と教育との関係をどのように整理するのかを確認したい。まずノートの前半部において、

女学校モ男子校も、一般ニ其恵ヲ蒙らしめ、一般ニ進歩せしむる事必要なり。  
(19頁)

と教育を広範囲に普及させる必要を説いた上で、

宗教ト教育ハ全ク別離スベシ。別々ニ働ヲナスベシ。然らざれば教育を普スルコト能ハズ。而して宗教、別日別処ニテ其働ヲスベシ。真信仰自由ニナスコト大切ナリ。(21頁)

と述べ、梅花女学校や新潟女学校のように、女学校の主義あるいは一環としてキ

リスト教主義教育を行った頃と大きく主張を変え、宗教と教育の場を分けるべきであると明確に示した。

これ以降、成瀬はこのノートにおいて宗教と教育との関係の特記しておらず、普く「女子」「婦人」を対象に女子教育の方針を構想したことがうかがわれる。さらに、「女子教育方針」という小見出しの後、次のように記した。

順序ヲ重ズ。少クトモ百年ノ計ヲナサザル可らず。先ず健全ナルホームヲ作ルベシ。道徳、智識トモホームニ於て養フノ外、日本ヲ改良するの道なき也。

(中略) 人心ヲ、第一己ニ省ミさせ、第二ホームヲ作らせ、第三一國を営むの責任を負ワしむべし。(62~63頁)

第一に己の成長に心を傾け、第二に家を治め、第三に一國を形成する一人として責任を持つという、第一~三の順序を重んじる方針である。この方針は、帰国後に執筆する『女子教育』において、女子を「第一に人として、第二に婦人として、第三に国民として」<sup>42</sup>教育すべきとした方針と類似しており、この頃の研究が活かされることがわかる。

成瀬は、個人としての信仰心は別として、学校運営上の教育と宗教とは分けるべきであるとした。この時点では、「はじめに」で参照した新井氏の論考にあるように、日本での牧師・教育者としての経験が「教育を普スルコト能ハズ」との判断に影響したと考えられる。しかし、未だ成瀬個人の構想であることに変わり無く、帰国後、この方針の共有と精査に努めることとなるのである。

### (3) 澤山保羅伝の出版

前節まで、成瀬が天職を「社会改良者」「女子教導者」と定め、キリスト教を含む宗教への信仰心を教育活動と分けるに至ったことを確認した。では成瀬は、個人としてキリスト教やその出会いをもたらした故澤山保羅との関係をどのように整理したのであろうか。

前記のノート「女子教育之方針」には、「恩ニ報ユ」として、

実ニポーロハ、正ニ徳ナク却テ罪アリ過失アルヲ知り、只神ノ恩ニ由テユルサレシト、多クノ恩愛ノミヲ蒙リシコトヲ識ルガ故ニ、吾ガ人ヲ恵ム、人ヲ助ル、人ヲ教ユルトイフ心ナリ。只恩ニ感ジテ己ノ負目ヲ幾分ニテモ返報セントイフ精神也。(中略) 吾亦同シ。吾ニ徳ナシ、善ナシ、罪ノミアリ、之ヲ赦サハル。(中略) 之ヨリ恩ニ感ジテ幾分ニテモ其恩ニ報ズルノ精神、負目ヲ返スノ精神ニテ働クノミ。(5~6頁)

と記し、また、

今、神ハ余ニ日本社会ヲ救フノ術ヲ考へ、其準備ヲナサシメントシテ此処ニ送り玉ヘリ。之ヲ忘ル可ラス。(10頁)

との文が見られる。ここで成瀬は、キリスト教の使徒パウロが神の恩に報い、負目を返すように生涯を送ったのと同様の精神を以て働くことを宣言した。そして神が日本社会を救うために成瀬をアメリカ留学まで導いたという、現状に至るまでの因縁を再認識し、自身の人生におけるキリスト教との出会いを生かす姿勢を記した。

また成瀬は、1892年2月頃<sup>43</sup>、澤山保羅の伝記をアメリカにおいて出版する計画を立てる。同年5月17日には、吉敷村の谷川熊五郎（1850～1921）を頼り、自身が知らない澤山の幼少期について尋ねる書簡を送った。

何卒、御両親或は御親族への御計り之上、凡て先生之御手ニて出来ル丈の材料御蒐集之上、御送附被成下候へば幸甚之至ニ存候。<sup>44</sup>

谷川は澤山の2歳上で歳が近く、また憲章館の跡に建った良城小学校の校長を1880年から1897年まで務める人物である<sup>45</sup>。成瀬は谷川を「先生」と呼んでおり、彼の立場を踏まえて書簡を送ったことがわかる。これに対し谷川は、

就きてハ保羅之幼時乃ち馬之進ころの事共御尋ねニ預り、委細承知致候。然処、彼れが修学之経歴位ハ十分相分り居申候へども、他之出来事等は格別相分り不申候。併しながら少々は小生之存居候事、況御座候ニ付、是ハ後便ニ申送り候覚悟ニ御座候。同人書状は、現今小生手許ニ御座候分十九通程御座候へ共、是を差送り候ニは多分之郵税を要し候ニ付、其内ニて両三通丈筆写之上、後便ニ差送り申候覚悟ニ御座候。<sup>46</sup>

として、手元にある澤山書簡を書写して送る等協力する旨を成瀬に返信した。

さらに、伝記の出版は日本語の草稿<sup>47</sup>から英語に訳す作業が行われ、同窓の学生パットン（C. S. Patton）の助力を受けたことが知られる<sup>48</sup>。出版元は組合教会日曜学校協会出版部（congregational Sunday-school and publishing society）であり、澤山の伝道者・女子教育者としての功績を現地の教会から発信することとなった。故郷や現地の協力者を得て、1893年9月“A Modern Paul in Japan”が出版される。

成瀬は伝記の出版によって澤山を憲章し、尊敬の念を表明した。この本の第1章は、著者成瀬と澤山が同じ村に生まれたという記述から始まる。今後、キリスト教主義にはこだわらない立場から女子大設立に取り組もうとする成瀬にとって、澤山伝の出版は、同じ村に生まれ、キリスト者として活動してきた自身と澤山との、分岐点としても位置づけたのではなかろうか。4ヶ月後の1894年1月、帰国した成瀬は、女子大設立のため多くの人々と面会し、『女子教育』出版と、賛同の呼びかけに奔走するのである。

### 3. 女子大設立運動

#### （1）内海忠勝の助言

帰国後、成瀬が女子大設立計画を相談したのは、吉敷村出身の政治家である内海忠勝（豪助、1843～1905）であった。内海は、成瀬も記憶する奇兵隊に客員として一時期入隊した一人であり、良城隊では五番小隊司令士として芸州口の戦いに参加し、重傷を負ったこと等が記録に残る<sup>49</sup>。明治時代に入ると兵庫県庁に勤め、その後長崎等の県令、兵庫等の県知事、大阪や京都の府知事を歴任し、1899年貴族院議員、1900年会



日本女子大学成瀬記念館所蔵

計検査院長、1901年第一次桂内閣内務大臣となる人物である。内海は、女子大設立運動に際して、

独り内海男のみは始めより余が志を貫徹するは殆どなし能はざる程困難の事ならんと言はれたれども、其の志を挫くやうの言葉を発せられざりしのみならず、いつも余を励して生涯其の確信を貫くべきをいはれ、且つ常に此の事業を助くるの態度をとられたる。<sup>50</sup>

と成瀬によって記憶され、日本には教育事業等に多額の寄附をする習慣がないことを危惧しながらも、成瀬の考えを支持し、尽力したと伝わる<sup>51</sup>。1894年4月29日の成瀬に宛てた内海忠勝書簡には、

将又、総理・文部両大臣より紹介書之事御申越。是ハ何時も相認可申候。何事之為と面会之要点を相記し置不申てハ、議会開会前多忙之際ニ付、必ス謝絶可致と相考申候間、御面談之要旨御申越可被成。右一応之御答まで如此候。<sup>52</sup>

とあり、成瀬は内海の仲介で総理大臣 伊藤博文と文部大臣 井上毅に面会しようとしたことがわかる。そして内海は、両大臣から紹介書を提出するように返答があったとした上で、紹介書は自分がいつでも書くが、面会の要点を記さなければ議会前は多忙なため面会謝絶されてしまう、面談の要旨について指示してほしいと成瀬に問い合わせた。

このように内海は、面会の際の作法を成瀬に助言し、伊藤等との仲介を請け負った。ではなぜ内海に仲介が可能だったのであろうか。内海と伊藤は、幕末を生き抜いた長州藩の同世代であり、1868（明治元）年、内海は伊藤の勧めによって兵庫県庁に入り、官吏・政治の道に進んだ経緯があるほど既知の間柄であった<sup>53</sup>。また、成瀬に協力する理由については、内海は兵庫県庁にいた頃、佐畑信之・野村致知・服部章蔵・中原国之助等、吉敷村出身者を自宅に下宿させており、内海の自伝に、

此時余ハ僅カ三十円位ノ小給ニテ、家計困難ナルモ、同志ニ対シ、又ハ同郷ノ因ニ対シ、拒絶スルニ忍ヒサリシ故、家居ノ狭隘ト粗食トヲ厭ハサルモノハ、真ニ苦楽ヲ共ニスルノ覚悟ニテ悉ク同居シタリ。<sup>54</sup>

とあるように、同志・同郷であることに強く因縁を感じ、自身の生活を顧みず援助を行ったことがわかる。吉敷村出身の後輩であり、佐畑の従弟にあたる成瀬に助言を与えた理由には、女子教育への理解だけでなく、このような同郷の者に対する一貫した考えがあったためと推察される<sup>55</sup>。

さらに内海は、女子大設立運動の最中にも成瀬を励ました。日清戦争の反動により日本国内が不景気となり寄附金が滞り<sup>56</sup>、成瀬が一時期広岡のもとで職を得ながら苦悩していた時のことである。1898（明治31）年1月3日、成瀬が麻生に宛てた書簡には、内海との会話の内容が記される。

先夜、内海氏ト夜深更ニ至るまで種々内閣組織等ニ関し話致し、又学校の事も相談致申候。然ルニ、若し小生が一時ニても他ニ職を取ル様の事をしてハ、此業ハ破レルならんと被申候。而して今度内閣組織出来上り候ハ、又々上京、運動ニ着手す可き旨被申候。<sup>57</sup>

内海は成瀬が女子大設立運動とは別に職を得たことを誡め、新内閣が組織された後、再度運動に着手するようにと説いた。そしてこの書簡の後10日ほどで第3次伊藤内閣が組閣される<sup>58</sup>。このように、設立運動は政情や景気の影響を受けたが、政府は国際的地位の向上を目指す中で、教育政策として初等教育の徹底や女子中等教育の整備を進めており、1899（明治32）年2月に「高等女学校令」を發布する。男子の「中学校令」發布は1886（明治19）年であり、13年を経て女子中等教育の整備が行政的になされたわけであるが、女子大設立運動を再開した成瀬にとっては、高等教育の場を創るための時勢が整いつつあったとも捉えられよう。内海が成瀬の代りに時機を見計らい助言したことは、設立運動を再度軌道に乗せる契機となったのである。

なお、成瀬が出郷時から折に触れて頼りにした佐畑は、成瀬留学中の1893年3月に亡くなる。『吉敷村史』佐畑信之の項には、幕長戦争への参戦や、兵庫県庁官吏の後、神戸電灯会社の社長を務めたことが記される<sup>59</sup>。そのような経歴と並行して、佐畑には成瀬の在郷時から留学に至るまで、成瀬の転機に影響を与え、支援した従兄としての姿があった。成瀬が後に講話等において「従兄」を語るのは、吉敷村において受けた影響以外にも、身近な理解者として思い出される面があったためであろう。

支えとなる親戚を亡くすも、成瀬はやはり同郷の縁を頼り、内海によって励まされながら活動を続けるのである。

## （2）伊藤博文との面談

成瀬は帰国後、内海への相談と並行して教育関係者や政治家を中心に面談を求め、1893（明治26）年11月から1894年12月に使用した日記<sup>60</sup>にその内容を控えた。相手は文部省専門学務局長 木下広次、内海の仲介によって機会を得た伊藤や文部大臣、慶應義塾の福沢諭吉、「美術学校」「音楽校」<sup>61</sup>の関係者等であった。

ここで、ノートに記される順に文部大臣、伊藤、木下との面談時の控えを確認したい。まず文部大臣<sup>62</sup>との面談控えを、便宜上 a~d と記号を付して抜粋する。

a 私立及官立の関係

= 当時私立ハマシテル有様ヂヤガ、将来大ニ同様ニスルの方針。

b 序文の事 = 拝見スル云々。

c 宗教の事 = 衝突ヲ防ぐ為、宗と教育ヲ別つこと。

又血ヲ流されば、日本ヲ全くクリスト教ニ化ス可らざる事。

d 女子教育は振ハヌ。まだ書規部の方が尤も□□□也ト。

a は、具体的には不詳だが私立学校と官立学校の位置づけについて、特に私立を主体とした返答を記録する。b の「序文」とは、1896年に『女子教育』の序文として用意したものであろう<sup>63</sup>。成瀬は留学中から万寿枝に語ったように、帰国後すぐに『女子教育』の執筆に取りかかり、「序文」を持って文部大臣のもとを訪れ、確認を求めたと考えられる。c は、以前から成瀬が決めていた宗教と教育とを分ける方針についての確認である。「宗と教育ヲ別つ」点では成瀬と同意であ

るが、さらに衝突が起きた場合にはキリスト教による教化に警戒する姿勢を見せる。dは、女子教育は盛んにならない、実業教育が適当という見解である。

続けて記録されるのが伊藤である。同様に a～e として抜粋する。

a 宗教と教育—日本のみ孤立スル能ハザル故、欧米の道德ヲ機用ス可キコト。

b 女子教育の困難＝高等教育ヲサスルト、年齢の不足及旧風トノ衝突。

＝英学の事ト。故に形の上ニは世ト一致シ、各々の主義ヲ主張スルコト。

＝凡ての人々困難話をスルノミ云々。

c 文部省ニテク、ルコトハ出来ヌ。手離ス積リ云々。

—独逸のは宗教上の弊を防グ為ニ、政府ニテヤルコト＝欧米の教育家ハ、宗教心ヨリ乎学問上のインタレスヨリセル。日本のは、役人風ト職務ト思フ故、熱中せず云々＝大学如きも薄弱云々。

d 同様ニ心易シ＝バン茶＝度々来る可シ云々。—政治家風

e 学校地位＝大阪ヲヨシトス云々。＋日本中より集ルニ。

まず a は、文部大臣と話した内容と同様に、宗教と教育の分離に関してであろう。伊藤は欧米と比して知識が乏しくなることを危惧し、「欧米の道德」を教える中で宗教的な話題に触れさせるべきと補足した。b は、女子高等教育は「この点で難しい」という困難話が寄せられるであろうから、時勢や現在の女性に適合する形で成瀬が考える女子高等教育を主張するよう助言した。成瀬が文部大臣に「序文」を見せたことから、伊藤にもこれを見せたとするならば、広義には今後の主張の仕方について、狭義には『女子教育』執筆への助言とも捉えられる。c は文部省として女子大を創る予定は無いこと。e は女子大の建設地を大阪にする案。加えて d は「度々来るように」と今後の面談を促したことが記される。伊藤は成瀬の女子大設立計画を肯定した上で、実現に向けたより具体的な見解を提示したことが読み取れる。

以上、文部大臣及び伊藤との面談における論題の共通点を考えると、一点は宗教と教育の分離、もう一点は女子大を私立学校として設立する方針についてであろう。成瀬にとって、この二点は時の総理と文部大臣に確認すべき問題であったことがうかがわれる。

次に、木下の部分を同様に a～f として抜粋する。

a 大学ニ女子の入学ヲ許さず。

b 男子高等教育ハ普通アリ云々。

c 如何ナル専門教育、或ハ職工ハ女子ニ適スルヤ。或ハ男子ニ適スル分ラズ。

d 音楽も未日本のものなし。

e 美術。

f 画学教授法も未だ分ラズ云々。

a は現行の「大学」すなわち帝国大学に女子の入学を許すことは無いという見解。

b は男子の高等教育においては普通教育が行われること。c 以下は、男女それぞれに適した専門教育や技術職が何であるか、音楽教育や美術教育をどのように行うべきか「分ラズ」との返答が記される。成瀬はこの後に、

何事も分らず。而して之を研究し、之ヲ試験して質スモノなし。日本教育の

方針ヲ定むる文部省然り。誰か此方針ヲ定むるものぞ。

と記し、日本における女子教育の研究が進んでおらず、誰が方針を定めるのかという憤りを吐露しており、却って成瀬にとっては『女子教育』を執筆する原動力となったことが推察される。またこの面談により、共学が許されない以上、やはり女子大を創る以外に無いことや、成瀬が普通教育に関心を持って木下に質問したことがわかる。後節で述べるが、成瀬は女子高等教育においても普通教育を重視するのである。

以上のような面談の結果として、宗教と教育とを分け、女子大を私立として設立する方向性が示されたと言えよう。ではこれらの面談を経て著された『女子教育』は、どのようにまとめられたのか、次節において確認したい。

### (3) 『女子教育』の出版

成瀬の代表的著書である『女子教育』は、1896（明治29）年に出版され、女子を「第一に人として、第二に婦人として、第三に国民として」教育すべきと述べたことで知られる。女子大における教育の軸として「智育」「徳育」「体育」「実業教育」を順に挙げ、特に「本邦女子教育の欠点は、智育の不足にあり」として男女間の智力及び智識量に大きな格差があることを問題視し、「重きを普通教育に置くべし」との考えを示した。

この女子教育上の普通教育については、千住克己氏<sup>64</sup>によると、1882年（明治15）年、普通科教育を行う官立東京女学校が、教員養成を主眼とする東京女子師範学校の附属高等女学校として位置づけられる。そして1891（明治24）年の改正「中学校令」において、男子の尋常中学校と同一程度とされたことが確認でき、中等学校でありながら「高等の二字を冠したことは、中等教育を以て女子の一般普通教育の最終機関とするということの意味」し、「極論すれば、国家が重視する女子中等教育は師範教育だけということであり、国家的有用性の観点から外れる女子教育は国家の配慮の外で発展しなければならぬという男女の中等教育の跛行的状態を生ずる根になった」とされる。

成瀬が考える普通教育重視の女子高等教育は、「国家の配慮の外」即ち私立学校が担う時勢にあったのである。前節において、成瀬が文部大臣と伊藤に投げかけた論点の一つに女子大を私立とする方針があったことを述べたが、この点は留学中のノート「女子教育之方針」に、

女之学校は私立あらざる可らず。吾国の自立、自由、自活を盛ならしめんには、私立学校を盛ニなさざる可らず。（143頁）<sup>65</sup>

と既に記しており、成瀬が面談以前から私立として設立する考えを持っていたことがわかる。成瀬はこの考えをもとに2人との面談を経て、私立にする方針を定めたからこそ、「重きを普通教育に置くべし」との提言をある意味では自由に打ち出すことができたのではなかろうか。

次に、もう一点の宗教と教育の関係については、

古往今来、善行美談若くば高尚なる思想は、大概宗教の感化に起因せざるなきにあらずや。

と読者に訴えかけ、宗教から受ける道德上の感化は非常に大きく、宗教教育と道德は切り離せないとした<sup>66</sup>。ただし、

学校に於ては唯凡ての人心に通有せる宗教心を開發するをもて目的とすべからず。一定の神学、教条等は之を避け、只生徒の自然の宗教心を發育せしむべし。宗教上一般の真理と各宗教の特性とを知らしむるに止め、一定の宗教宗派を信ずることに至ては全然之を生徒各自の自由撰択に任すべきなり。

伝道と教育とを混合し、学校を伝道の機関とすべからざるなり。<sup>67</sup>

として、学校を伝道の機関とするべきではないと明確に述べる。宗教と教育の場とを分けることを結論としつつも、宗教が道德心を養う糧となることや、各宗教の特性を知識として学ぶことを否定しない論法は、伊藤との面談を活かしてのことと推察される。

また、以後の女子大設立運動の最中には、1899（明治32）年の「私立学校令」と共に文部省訓令第12号（いわゆる宗教教育禁止令）が發布され、宗教教育の禁止が定められる。女子大はこの時点で「私立学校令」によって認められることを目指すため<sup>68</sup>、この訓令にも準じる必要があったが、既に『女子教育』出版の段階で解決していたことになろう<sup>69</sup>。

以上、二つの論題について取り上げたが、成瀬は留学中に考察した「女子教育之方針」をもとに伊藤等と面談し、自身の構想が政治家によって肯首されるかを確認しながら、『女子教育』の内容を精査したことがうかがわれる。ただし、「女子教育は振ハヌ」といった否定的な意見には左右されず、あくまでも自身が考える女子大を実現するための論法を模索したと言えよう。

#### （4）賛同者の広がり

『女子教育』が出版された1896年2月以降、女子大の方針が固まり、設立運動は本格的となる。ここで避けて通ることのできない課題は、設立資金をいかに集めるかであった。成瀬はこれ以前から頭を悩ませて各所に意見を求め<sup>70</sup>、内海からは「出来るだけ広く朝野の有力者に発表して、其の力を借りる方針を採った方がよからう」<sup>71</sup>と返答され、伊藤からも「在朝在野、又政党の如何に拘はらず協力して、成就せしめねばならぬ」<sup>72</sup>と言われたとされる。

1895（明治28）年、成瀬は梅花女学校時代から関わりがあった奈良の山林地主土倉庄三郎を訪ねた。土倉から三井家出身の実業家広岡浅子を紹介され、二人から運動資金を得ることとなる。1898（明治31）年には北越学館時代からの友人であり、同志社の教員であった麻生正蔵にも協力を求め、広岡等と手分けし、あるいは共に各地に足を運び、書簡を認め、賛同者の勧誘を行った。

この間1896年7月までに「女子大学校設立之趣旨」<sup>73</sup>を作成し、ここに初めて「女子大学校」の名称が登場する。この趣旨書によって女子高等教育の推進を訴え、基本財産として30万円を募集すること、10万円の段階で設立に着手することを記し、勧誘の際に配布した。

そして7月以降、「日誌」（創立事務所日誌<sup>74</sup>）に日付と面談相手、面談内容、郵送費などの運動諸経費、賛同者からの寄附金額等が記録されるようになる。「日

誌」は全4冊あり、1冊目が1896年7月17日～10月30日、2冊目が1898年5月1日～1899年7月16日、3冊目が1899年7月16日～1900年4月10日、4冊目が1900年4月11日～1901年3月5日までである。

では実際にはどのような人々から賛同を得たのであろうか。「日本女子大学校発起人・賛助員名簿」（明治33年10月）、「日本女子大学校創立資金義捐名簿」（明治38年2月28日付）等をもとに作成した表、及び前記の「日誌」、『成瀬先生伝』により、経過の大略を追いたい。

まず注目されることは、運動初期の賛同者に、大阪や新潟といった成瀬にとって地縁がある土地の有力者<sup>75</sup>が多いことである。大阪については、府知事を務める内海の人脈も大きかったとされる<sup>76</sup>。「日誌」によると、成瀬等は運動が始まるとまず兵庫・大阪を巡り<sup>77</sup>、その後、成瀬が一人新潟に向かう<sup>78</sup>。新潟における賛同者には新潟女学校時代からの支援者が含まれ、成瀬が目指す女子教育に対する人々の期待がうかがわれる。「第二の郷里」<sup>79</sup>新潟において初期からまとまった賛同を得たことは、運動の士気を高めたであろう。

政界・財界においては、既に伊藤から西園寺公望を紹介され<sup>80</sup>、西園寺は成瀬に貴族院議員で学習院長の近衛篤磨を紹介し、近衛も賛同する<sup>81</sup>。さらに西園寺は実弟である住友吉左衛門を紹介し<sup>82</sup>、住友は1万円という高額な寄附をすることとなる。加えて伊藤の口添えであろうか、島田三郎を介して大隈重信と会い、大隈の紹介で渋沢栄一や森村市左衛門に会い<sup>83</sup>面談を重ねる中で賛同を得ていく。渋沢は住友と共に創立委員・会計監督者<sup>84</sup>となって「収支計算表」の確認等により資金の出入を監督<sup>85</sup>し、自らも設立資金として3千円を寄附した。森村は教育・医療・慈善等の公益事業を援助する団体森村豊明会を発足させ、1万8千円余りの寄附をはじめ、後々も多額の寄附を行う。また、内海の説得により<sup>86</sup>岩崎弥之助が1万円余りを寄附し、さらに内海は成瀬の依頼によって1899（明治32）年6月、時の文部大臣樺山資紀を訪ね、賛同を得る<sup>87</sup>。

創立期の賛同者は870名にのぼっており、以上はほんの一部の流れに過ぎないが、成瀬はこのように有力者たちを次々に紹介されて面会し、また賛同者を頼って更に次の賛同者を得ていった。同意を得られないこともあったが<sup>88</sup>、内海の仲介によって伊藤と面談して以降、着実に政界・財界の賛同者、高額寄附者を増やしたのである。

「日誌」が始まる1896年から財団法人化を申請する1905年に至る創立期の寄附金募集においては、約14万9千円が集まり（約束分を含めると約33万5千円を見込んだ）<sup>89</sup>、財団法人化に先んじた1901年4月20日、日本女子大学校が開校する。

このように、成瀬は内海や伊藤の助言に従って「在朝在野」、政治家においては政党に拘らず賛同を求めた。多くの賛同者を得た背景には、土倉・広岡・麻生の尽力は勿論のこと、伊藤等長州藩出身者の政界における影響力と、成瀬との距離も近く、且つ政界にも通じた内海の助力が大きな要因となったと推察される。

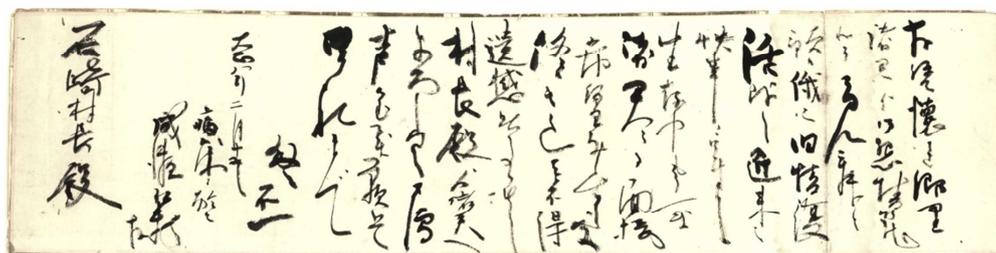
また、学校方針として、あくまでも成瀬を創立者に掲げた私立学校であることを前面に出し、キリスト教等の主義を打ち出さなかったことで、多くの人々を勧

誘対象とすることを可能としたのである。そして、様々な主義や立場を持つ人に対し、女子を「人として、婦人として、国民として」教育する方針に関する賛否の判断に論点を集中できたことが、賛同者を定着させた所以ではないかと考えるのである。

## おわりに

以上、成瀬の女子大設立について、特にキリスト教主義との距離を置く過程に焦点を当てた。成瀬は留学中から、女子教育を日本中に普及させるためには教育の場と信仰を分けるべきであると考えたが、それを確信へと導いたのは、伊藤博文等政治を担う者たちとの面談であった。また、この面談を通して女子大を私立学校とする方針も固めたことで、多くの賛同者を得るための土台が出来たのである。さらに成瀬は、山口県出身者であるという自負を持ち、出身地を最大限に活かした。特に留学からの帰国後、内海忠勝を頼ったことで、成瀬の活動が現実にもたらされたものとなる。内海からの賛同を端緒として、時の総理大臣伊藤と会い、政界・財界の賛同者を次々に増やしていくのである。明治時代の日本における女子大設立は、このような山口県出身者との関わりによって実現した一面があると言えよう。

最後に、成瀬の生涯を通して、同じく吉敷村出身の澤山保羅、佐畑信之の影響や助力があったことを振り返りたい。加えて日本女子大学の賛同者には、内海忠勝、坂仲輔、中原岩三郎、服部一三といった名が見られ、彼等は皆吉敷村の出身者である。成瀬が関わった人々の全体から考えるとごく少数ではあるが、成瀬の活動が、出身地の身近な人々とのつながりによって展開したことがこの顔触れからもうかがわれる。現存する成瀬最晩年の書簡<sup>90</sup>が吉敷村「石崎村長」を宛先とした「郷里諸君」へのものであることも、成瀬が生涯を通して「吉敷の成瀬」であったことをあらわしているのではなかろうか。



日本女子大学成瀬記念館所蔵

<sup>1</sup> 制度上は、1901（明治34）年の段階で「私立学校令」にもとづく各種学校、1903年からは「専門学校令」にもとづく専門学校。創立当初から附属高等女学校生を含む500余名の生徒が入学し、家政・国文・英文学部の三学部が設けられ、教授陣が揃い、学寮等が整備された組織的な女子高等教育機関として始まったことで「日本初の女子大学」と言われる。

<sup>2</sup> 成瀬仁蔵『女子教育』青木嵩山堂 1896年, p114~115頁。

<sup>3</sup> 以下、史料の下線・句読点、記号〔〕（脱字）・〈〉（行間・原本の注記）は筆者が補った。

<sup>4</sup> プロテスタント、組合協会派。

<sup>5</sup> 成瀬仁蔵著・新井明訳『澤山保羅—現代日本のポウロ』（日本女子大学創立百周年記念）日本女子大学 2001年, p220。

<sup>6</sup> この「女子大学」では、「知育」「徳育」「体育」を重視し、普通教育を行うとした。当時（1896年）の日本では、女子の小学校就学率が5割に満たず、高等女学校に進みさらに進学しようとした者の進学先には、教員養成に特化した女子師範学校のみであった。1900（明治33）年には津田梅子の女子英学塾（現 津田塾大学）、吉岡弥生の東京女医学校（現 東京女子医科大学）が設立され、私立の塾・学校において女子のための高等教育が始まる。但しいずれも一つの専門に特化した少人数の学びの場であり、成瀬による総合的な「女子大学」設立を目指した活動が、いかに突飛であったかがわかる。

<sup>7</sup> 仁科節編『成瀬先生伝』桜楓会出版部 1942年。

<sup>8</sup> 中畠邦著『成瀬仁蔵』（人物叢書 新装版）日本歴史学会 2002年。

<sup>9</sup> 片桐芳雄「成瀬仁蔵高等教育論の原点—長州吉敷の成瀬仁蔵」（『愛知教育大学研究報告』（64 教育科学編）2015年。

<sup>10</sup> 「故伊藤公爵記念会の御話」1909（明治42）年11月4日（加藤きよみ・山本文子（日本女子大学成瀬記念館）編『日本女子大学校長成瀬仁蔵先生述 実践倫理講話筆記 明治四十二年度ノ部』日本女子大学成瀬記念館 2012年, p109）。

<sup>11</sup> 三宅紹宣著『幕長戦争』吉川弘文館 2013年。

<sup>12</sup> 例として、「内海忠勝履歴」には、1866（慶応2）年6月小瀬川口（芸州口）に出陣した時の記述に「本陣総督大田報助」「一番小隊 長林治郎兵、（中略）五番小野資虎・内海忠勝、七番佐畑信之」等の名が見られる（山口県立山口文書館所蔵 毛利家文庫 73 藩臣履歴 12、1903（明治36）年）。また、高橋文雄『内海忠勝』（内海忠勝顕彰会 1966年）、同編『良城小学校百年史』（良城小学校開校百年記念事業委員会 1973年）を参考にした。

<sup>13</sup> 「故伊藤公爵記念会の御話」明治42年11月4日（前掲『日本女子大学校長成瀬仁蔵先生述 実践倫理講話筆記 明治四十二年度ノ部』, p110）。

<sup>14</sup> 1876（明治9）年6月から、熊毛郡室津村の室津小学訓導。なお伊藤博文は熊毛郡束荷村出身。

<sup>15</sup> 1877（明治10）年1月から、吉敷郡秋穂二島村の二島小学訓導。二島小学は1884（明治17）年、同村の長浜小学と合併し、長浜小学が廃校となった。この長浜小学は1874（明治7）年1月に山尾家が主唱者となって開校し、3月には同家からの寄附金により新校舎が建てられた経緯をもつ（100年誌編さん委員会編『二島小学校100年誌』二島小学校100周年記念事業実行委員会 1975年）。また、山尾庸三は工学教育や聾啞学校の設立など教育基盤の形成に貢献したことで知られ、1898（明治31）年には、父の遺志を受けて故郷二島の尋常高等小学校に基本財産として300円を寄附し、児童教育にも心を傾けた（萩博物館編『没後一〇〇年記念企画展 日本工学の父山尾庸三』2017年, p55「山口県吉敷郡二島尋常高等小学校基本財産寄附に付き感謝状」）。「山尾庸三君の建てられた」という発言は、このような山尾家および庸三の貢献に基づいたものと考えられる。

<sup>16</sup> 湯田における成瀬の経歴は未詳。『湯田小学校百年史』（山口市立湯田小学校 1977年）にも成瀬の名は見られず、主席ではなく助導等として湯田地域の小学校に赴任し現存の記録には残らなかった可能性もある。なお、湯田には井上馨の

生家があったことから（現 井上公園）、成瀬は講話時に、この生家を井上が東京に本邸を構えた後の別邸として認識していたと考えられる。

<sup>17</sup> 前掲『成瀬先生伝』, p39～41。

<sup>18</sup> 前掲『成瀬先生伝』, p39。

<sup>19</sup> 成瀬の追懐談によると、「一日話を聴いて、生まれ変わったやうな心持がしました」「わが生涯に於て、最も尊敬した人は澤山君である」と述べたという（前掲『成瀬先生伝』, p36、43）。

<sup>20</sup> 「梅花女学校の設立を祝す」1878（明治 11）年（日本女子大学創立七十周年記念出版分科会 成瀬仁蔵著作集委員会編『成瀬仁蔵著作集』（1）1974 年, p215。記事初出は『七一雑報』3（4）雑報社 1878 年）。

<sup>21</sup> 日本の信者のみによる自給論は、もとはアメリカン・ボードの日本伝道における一般方針であり、澤山はこれを実践する姿勢で伝道に臨んだ。澤山はこの姿勢を牧師として教会に求め、教育者として梅花女学校に求めた（新井明『澤山保羅—現代日本のパウロ』日本女子大学創立百周年記念 2001 年, p214～215）。

<sup>22</sup> キリスト者としての信仰心からか、この頃の成瀬は叔父の家に預けておいた先祖の位牌を持ち出して焼いてしまおうとしたこと等から、郷里の人々とも一時不仲となり「総ての人から見捨てられていた時が、私の最も熱心な時であつた」（前掲『成瀬先生伝』, p65）と回想するほどキリスト教に心を傾けた。

<sup>23</sup> 佐畑信之書簡、1887（明治 20）年 6 月 4 日、日本女子大学成瀬記念館所蔵 No. 3056。

<sup>24</sup> 新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』（9 来簡編 上）同朋舎出版, p327～328。

<sup>25</sup> 本井康博『近代新潟におけるキリスト教教育—新潟女学校と北越学館』思文閣出版 2007 年, p38。

<sup>26</sup> 前掲『近代新潟におけるキリスト教教育—新潟女学校と北越学館』, p36～37。

<sup>27</sup> 麻生正蔵「成瀬君と私」（『麻生正蔵著作集』日本女子大学成瀬記念館 1992 年, p834～835。初出は「丁酉倫理会倫理講演集」（415）1937 年）。麻生は北越学館の教員であり、成瀬の相談によく乗り、女子大設立に共に奔走する人物である。日本女子大学第 2 代校長。

<sup>28</sup> 本井康博『近代新潟におけるプロテスタント』思文閣出版 2006 年。

<sup>29</sup> 前掲『近代新潟におけるプロテスタント』。

<sup>30</sup> 佐畑信之書簡、明治 23 年 12 月 8 日、日本女子大学成瀬記念館所蔵 No. 818。

<sup>31</sup> 成瀬は佐畑から送られてきた証書に印を押し、田村に送って借金をしたと見え、1892（明治 25）年には 30 円を田村に返し、妻に、田村から証書を受け取って佐畑の印部分を切り取り、成瀬の印部分を焼いて自分のもとに送るよう指示している（成瀬仁蔵書簡、明治 25 年 10 月 6 日、日本女子大学成瀬記念館所蔵 No. 3609）。

<sup>32</sup> 成瀬仁蔵書簡、明治 24 年 1 月 17 日、日本女子大学成瀬記念館所蔵 No. 3584。「新島先生・レビット氏杯の卒業セン随分有名なる神学校」と説明している。

<sup>33</sup> 成瀬仁蔵書簡、明治 24 年 10 月 23 日、松村介石、白木（麻生）正蔵宛、日本女子大学成瀬記念館所蔵 No. 1861。

<sup>34</sup> 福井県出身、旧姓は服部。大阪の浪花公会において成瀬と出会い、成瀬 20 歳、万寿枝 18 歳の時に結婚した。成瀬と共に各地を廻るが、成瀬の単身アメリカ留学中に病が悪化する。成瀬は帰国後、女子大設立運動のために時間の面でも金銭の面でも万寿枝を顧みることができず、周囲と相談の上で離婚した。1900 年に 40 歳で病没、女子大開校を見ることはできなかった。

なお、浪花公会の信者となった経緯については、母方の叔父河村学而が浪花公会

により、勉学のため大阪にいた兄直一も受洗したことが影響したと考えられる（大門泰子「成瀬仁蔵の結婚と離婚―親族関係からのアプローチ」(『成瀬記念館』(23) 2008年))。また福井ではグリフィス等のお雇い外国人が重用され、英学に親しみやすい環境が影響した可能性もあるが、未詳である。

さらに万寿枝は、1897年頃麴町の兼重暗香の家に寄宿していた。兼重は吉敷郡大歳村（現 山口市矢原）の出身（『山口県立美術館コレクション展特別展示 没後70年兼重暗香』2017年）であり、ここにも成瀬と山口県出身者とのつながりが垣間見られる。

<sup>35</sup> 成瀬仁蔵書簡、明治24年2月14日、日本女子大学成瀬記念館所蔵No.3635。

<sup>36</sup> 麻生正蔵は成瀬が留学前「私に向つて、女子大学設立の準備として、女子教育研究視察と宗教研究とのため、米国遊学の志を有することを洩らし」とするが（麻生正蔵「成瀬君と私」(前掲『麻生正蔵著作集』, p834、初出は「丁酉倫理会倫理講演集」(415) 1937年))、女子大設立後36年を経た1937(昭和12)年の回想であり、講演時の補足の可能性もある。現状では、成瀬自筆の万寿枝宛書簡が、女子大設立を吐露した最初の史料と考え参照した。

<sup>37</sup> ウェルズリー女子大学に1週間視察滞在したほか（成瀬仁蔵書簡、明治24年4月16日、日本女子大学成瀬記念館所蔵No.3589）、女子大学・共学大学を問わず視察に訪れ、その他にもボストンの牧師会やアメリカン・ボードの人々、工場など、アメリカ社会の様々な面に接した（前掲『成瀬仁蔵』(人物叢書 新装版))。

<sup>38</sup> 前掲『成瀬先生伝』p111~114に日記の一部が引用される。ただしこの日記は現存せず、『成瀬先生伝』編纂後、何時かに散逸した可能性がある。

<sup>39</sup> 片桐芳雄氏により成立年が比定される（片桐芳雄解題・日本女子大学成瀬記念館（岸本美香子・永山由里絵）編『成瀬仁蔵資料集3 (D2008) アメリカ留学時代のノート（女子教育之方針、種子）』日本女子大学成瀬記念館 2018年。

<sup>40</sup> 同上、片桐芳雄解題。

<sup>41</sup> 同上、片桐芳雄解題。

<sup>42</sup> 前掲『女子教育』, p29。

<sup>43</sup> 成瀬仁蔵著・新井明訳『澤山保羅―現代日本のパウロ』（日本女子大学創立百周年記念）日本女子大学 2001年, p213。

<sup>44</sup> 茂義樹編『澤山保羅全集』教文館 2001年, p609、梅花学園資料室所蔵5038(N008)。

<sup>45</sup> 三坂圭治編『吉敷村史』(復刻版) マツノ書店 1988年, 281~282頁。初版は1937年。

<sup>46</sup> 谷川熊五郎書簡、明治25年7月5日、日本女子大学成瀬記念館所蔵No.3904。

<sup>47</sup> 日本女子大学成瀬記念館所蔵。

<sup>48</sup> "A Modern Paul in Japan、成瀬による前書きに謝辞が述べられる（前掲『澤山保羅―現代日本のパウロ』）。

<sup>49</sup> 「芸州表出張日記その他一件記録」8月2日「怪我人」に「〈ヒザ・クビ少シ宛〉内海豪助殿」、8月7日「〈ヘソノ上〉内海豪助殿」とある（山口県文書館所蔵、野村家文書 1355、1866（慶応2）年）。

<sup>50</sup> 『家庭週報』(17) 明治38年2月11日。

<sup>51</sup> 前掲『成瀬先生伝』, p173。高橋文雄著・三坂圭治監修『内海忠勝伝』内海忠勝顕彰会 1966年, p322~323。

<sup>52</sup> 内海忠勝書簡、明治27年4月29日、日本女子大学成瀬記念館所蔵No.861。

<sup>53</sup> 内海は1868(明治元)年、神戸や横浜で英学を修めようと考え資金を集めたが、伊藤から「馬鹿ナ借金ヲスルヨリ、兵庫縣ニハ雇英人モ居ルコト故、同県ノ

役人トナリ、傍ラ英学ヲ為スヘシ」と説示され、今後の指針を得て「夢ニ牡丹餅」と喜び、兵庫県庁への出仕を決めたという（「内海忠勝履歴」、山口県文書館所蔵毛利家文庫 73 藩臣履歴 12、1903（明治 36）年）。

<sup>54</sup> 「内海忠勝履歴」（山口県文書館所蔵、毛利家文庫 73 藩臣履歴 12、1903（明治 36）年）。

<sup>55</sup> 内海忠勝の息子勝二は「私は亡父が以前から女子大学創立発起人の一人として及ばずながら尽力して居ったといふ関係上、又成瀬先生と郷里を同じくしているといふ関係から父が逝去の時、若年の私の為に特に成瀬先生に相談役の一人として立つて戴く事を願ひ、（中略）さふ云う段々の関係上私は常に先生を第二の父といふつもりで爾来何事にも先生に御相談をして居ったのであります」（内海勝二「完備の人格」（日本女子大学校第 25 回生編『成瀬先生追懐録』桜楓会出版部 1928 年））と述べており、同郷であることが息子の代にも大切にされた。

<sup>56</sup> これ以前から、成瀬は麻生に宛て、不景気を歎き自らを責める書簡を送っている（成瀬仁蔵書簡、明治 30 年 11 月 4 日、日本女子大学成瀬記念館所蔵 No.1888 等）。

<sup>57</sup> 成瀬仁蔵書簡、日本女子大学成瀬記念館所蔵 No.1890。

<sup>58</sup> 第 3 次伊藤内閣は 6 月 30 日まで。その後大隈内閣（～11 月 8 日）、山縣内閣（～1900 年 10 月 19 日）、第 4 次伊藤内閣（～1901 年 5 月 10 日）と続くが、伊藤は賛助員、伊藤の妻梅子は発起人に名を連ね、大隈は創立委員長、妻綾子は発起人。山縣はこの時点では賛助員ではないが、のちに寄附を行う。

<sup>59</sup> 三坂圭治編『吉敷村史』（復刻版）マツノ書店 1988 年、241～242 頁。初版は 1937 年。その他、高橋文雄編『吉敷地区郷土誌』（21 吉敷地区出身人物誌 5 山口市吉敷公民館 1960 年）に紹介される。

<sup>60</sup> 滞米末期から帰国後の日記。日本女子大学成瀬記念館所蔵 No.D2009。

<sup>61</sup> 音楽校は、「校長（上原六四郎）」とあるため、高等師範附属音楽学校。

<sup>62</sup> 内海とのやり取りの後、速やかに面会が実現したならば相手は井上毅である。井上は 8 月で文部大臣を辞任しており、ひと月ほど芳川顕正が兼任し、10 月から西園寺公望が就任する。成瀬は何時かに伊藤からの紹介によって西園寺にも会い、西園寺は次のように述べたとされる。「我が国今日の事情からすると、いかに国家の為に必要であつても、男子の為にすら各種教育機関が甚だ不十分であり、殊に女子教育に関しては、中等教育すら寥々たる有様であつて見れば、政府の手はなかゝゝそこまで届かない。どうしても先ず民間有志の努力に依つて設立して、政府が補助を与へるといふ順序にしないでは、女子の大学教育などを本邦に見ることは容易なことではない。又、元来天職を自覚した人が民間から事業を興すのでなくては、真の教育といふことは望まれるものでない。どうか大にやつてほしい。」（前掲『成瀬先生伝』, p177）このように成瀬を励まし、後に『女子教育』出版の際には中表紙の題字「恒徳」を寄せ、女子大創立委員の一人となる西園寺が、たとえ初対面であっても「女子教育は振ハヌ」と述べるとは考え難い。この記録のみによって断定することは難しいものの、面談を計画した 4 月末の時点での文部大臣が井上であることも考慮し、面談相手は井上であり、5 月から 7 月頃の記録である可能性が高いと考える。

<sup>63</sup> 実際に出版された『女子教育』の序文は、細川潤次郎（東京女子師範学校長等を務める）撰。

- 64 千住克己「明治女子教育の諸問題—官公立を中心として」(日本女子大学女子教育研究所編『明治の女子教育』(女子教育研究双書2) 国土社 1967年)。
- 65 片桐芳雄解題・日本女子大学成瀬記念館(岸本美香子・永山由里絵)編『成瀬仁蔵資料集3(D2008)アメリカ留学時代のノート(女子教育之方針、種子)』日本女子大学成瀬記念館 2018年。
- 66 前掲『女子教育』, p155~156。
- 67 前掲『女子教育』, p156~157。
- 68 日本女子大学成瀬記念館編『東京都公文書館所蔵 日本女子大学関係史料〔一九〇〇年—一九一六年〕』(日本女子大学史資料集 第十一(一) 2007年)所収の申請書類を見ると、女子大は、文部大臣に認知された上で、私立学校令に基づき東京府から認可される手続きをとった。
- 69 いくつかのキリスト教主義の学校は、この「訓令」に準じないことにしたため、私立学校としての特権をなくし、学生数が減少する困難に直面した(青山学院大学編『青山学院大学五十年史』2011年、梅花学園九十年小史編集委員会編『梅花学園九十年小史』1968年)。女子大設立時の学科と「学科課程」を確認すると、「宗教」の文字は見られない。10年以上を経た1918(大正7)年の成瀬著『女子教育改善意見』では、人格形成を主軸とし、文学や芸術学を総括する学科名として「宗教学科」を掲げるが、この時の成瀬は内閣に設置された臨時教育会議の委員に任じられており、専門家としての発言権を持っていた。また、女子大教員であり、聖ヒルダ伝道団メンバーのフィリップスは、学内あるいは学校が設立した寮では宗教教育は認められていないが、学生が学外において宗教教育を受けることには、制限は加えられていないと述べており(白井堯子『明治期女子高等教育における日英の交流—津田梅子・成瀬仁蔵・ヒューズ・フィリップスをめぐって』ドメス出版 2018年)、あくまでも公私の別の問題であったようである。
- 70 早稲田大学の市嶋春城は「如何にして其の資金を得べきやが、君の最も頭を悩ました問題で、いつもの協議と言ふは資金募集の実行方法であつた。君は熱誠の人であつたが、実務に長ずる人ではなかつたので、虚心に黙々として人の節を聴かるゝのが常で、自分のみならず四五後援者を次ぎゝゝに同じ態度で熱心に訪問された。当時自分は早稲田大学の経営の衝に当り、資金募集が何寄りも自分の大切な任務であつたから、募集方法の相談に出会つては実はツラかつた」と回想する(「成瀬君を追憶し女大開校当時の事に及ぶ」(桜楓会編『家庭週報』1456、昭和15年1月19日))。
- 71 前掲『成瀬先生伝』, p173。
- 72 「嗚呼伊藤公」(前掲『日本女子大学校長成瀬仁蔵先生述 実践倫理講話筆記 明治四十二年度ノ部』, p103、明治42年10月27日)。
- 73 日本女子大学成瀬記念館所蔵No.D0140。中村政雄編『日本女子大学四十年史』日本女子大学 1942年, p38~44。
- 74 日本女子大学成瀬記念館編『日本女子大学創立事務所日誌』(日本女子大学史資料集第一) 1995年~(日本女子大学史資料集第三) 1997年、計3冊に収録される。以下「日誌」と略記する。
- 75 政治家・銀行取締役・地主など。「日誌」及び清野泰子「日本女子大学創立発起人・賛助員名簿(新潟県関係)」(日本女子大学成瀬記念館所蔵、手書き資料)より。
- 76 成瀬は1905(明治38)年1月20日に亡くなった内海への弔辞において、「君ガ尽力ノ結果トシテ、第一回ノ寄附者ニ、大阪人士ガ比較的多数ヲ占メタル事実

ハ本校寄附簿ニ明カナリ」と述べる（『家庭週報』17、明治38年2月11日）。

<sup>77</sup> 「日誌」明治29年7月17日条～。

<sup>78</sup> 「日誌」明治29年8月4日条～。8月28日条には35名の名がまとめて記される。

<sup>79</sup> 「国運の発展と女子教育」（日本女子大学創立七十周年記念出版分科会 成瀬仁蔵著作集委員会編『成瀬仁蔵著作集』（2）, p1077、1910年8月新潟における講演）。

<sup>80</sup> 前掲『成瀬先生伝』, p177。

<sup>81</sup> 近衛篤磨日記刊行会編『近衛篤磨日記』（1）鹿島研究所出版会1968年, p99 明治29年11月4日条。

<sup>82</sup> 前掲『成瀬先生伝』, p177～178。

<sup>83</sup> 前掲『成瀬先生伝』, p178。

<sup>84</sup> 「日本女子大学校発起人・賛助員名簿」に「会計監督」と記される（日本女子大学編・発行『日本女子大学学園事典』ドメス出版2001年）。

<sup>85</sup> 1899年～1900年「寄附金領収通知書綴」（日本女子大学成瀬記念館所蔵No.D0103）や、部分的ではあるが1899年10月～12月の「会計監督承認簿」（同No.D0020）等が現存する。「会計監督承認簿」からは、他にも「成瀬氏車債及び手当ノ件」として成瀬の移動費に関して渋沢が承認し「栄一」印を押す等のページがあり（明治32年12月）、随時渋沢の確認を経たことがうかがわれる。

<sup>86</sup> 「日誌」明治32年4月24日条。

<sup>87</sup> 成瀬仁蔵書簡、明治32年6月16日、麻生正蔵宛、日本女子大学成瀬記念館所蔵No.1581。

<sup>88</sup> 近衛篤磨に九条公爵（道孝）を紹介してもらっても（前掲『近衛篤磨日記』（1）明治29年11月4日条）、賛助員に名が残っていない。また井上馨や（「日誌」2明治31年6月5日）、山尾庸三との面談記録があるが（「日誌」、明治32年8月9日）やはり賛助員に名が残っていない。また、会津藩出身の山川健次郎が「不賛成ニ付、面談ノ必要ナシ」と明確に反対の意を表明するなど（「日誌」、明治32年9月23日）、必ずしも賛同を得るばかりではなかった。

<sup>89</sup> 「日本女子大学校創立資金義捐名簿」（明治38年2月28日付）、日本女子大学成瀬記念館所蔵。

<sup>90</sup> 成瀬仁蔵書簡、1919年年2月、石崎村長（石崎哲二）宛、日本女子大学成瀬記念館所蔵（高橋文雄氏寄贈）。この書簡は、高橋氏が著した『成瀬先生小伝』（成瀬仁蔵先生50年祭実行委員会編1969年）に掲載される。この『小伝』は、成瀬の没後50年にあたり、山口市において50年祭が行なわれる記念に執筆された。

\* 本研究は「平成30年度明治150年記念 後世に伝えたい山口県ゆかりの人物等研究支援事業」の助成を受けたものである。

また本稿執筆にあたり、平成30年12月の中間報告会において三宅紹宣先生、稲益あゆみ先生より講評を賜るとともに、吉敷地区での調査に際しては山口市立良城小学校増野淳一校長はじめ先生方、吉敷村村長宛の成瀬書簡については山口市交流創造部古賀信幸氏にご教示いただいた。記して謝意を表したい。